

2019 NEWYEAR TALK



一般財団法人 防衛技術協会 理事長
横原 伸一

皆様 明けましておめでとうございます。平成最後の年が明けました。

日頃、防衛技術ジャーナルをご愛読いただいている皆様、また防衛技術協会の活動に深いご理解とご支援を賜っている皆様に厚く御礼申し上げますとともに、本年もご好誼のほどよろしくお願い致します。

昨年のわが国周辺の安全保障環境を振り返ってみますと、核廃絶、弾道ミサイル破棄を巡る北朝鮮問題、軍備増強を進め、南シナ海の支配強化を始めとして海洋進出を図る中国の動き、北方領土返還交渉開始の兆しが見られるものの、わが国周辺での活動を活性化させるロシア等、依然として厳しい情勢下にありました。

国内の防衛省・自衛隊の動向に目を転じますと、政策・組織面では、防衛計画の大綱の改定、新中期防衛力整備計画の策定、陸上自衛隊の陸上総隊の新設が、運用面では大阪府北部地震、西日本豪雨、北海道東部地震等での大規模な災害派遣、F-35の配備等が注目されたのではないのでしょうか。

さて、技術分野での進展を見ますと、注目されたのは無人システムとそれを凌駕する勢いで進化しているAIでしょう。民生用無人システムは、わが国でも公道での無人運転自動車の実証実験が行われる等、日進月歩ですが、平昌オリンピックでのIntel社が展示飛行させた1,218機のドローンの編隊飛行Swarm Droneもまた注目すべき技術でした。軍事用に目を転じますと平昌オリンピックの1ヵ月前、ロシア軍のシリア基地が13機のDrone編隊の攻撃を受けたことがニュースとなりました。Swarmコントロールされたものが、個々のDroneが個別に管制されていたのか不明ですが、将来的にも軍事技術のエポックメイキングな出来事として記憶されると考え

られます。この分野への注力は米中を筆頭に並々ならぬものがあることは引き続き注目すべき点です。

AIは、民生分野での進歩が極めて著しい技術であることは衆人が目の当たりにしているところです。Autonomy、AIを使った音声認識・画像認識・状況判断等の進歩は目を見張るものがあります。防衛技術分野でも米口中を中心にして無人システムへのAutonomyの適用、AIの警戒監視・目標類識別・情報分析・指揮統制等への適用の研究開発が急ピッチで進んでいます。そして、かつてGPS、インターネットに代表されるような軍事技術研究が先行して民間技術へスピンオフする形態から、AIに代表されるように民生技術が先行して軍事技術へスピンオンするいわゆるデュアルユース技術が注目されるようになり、その技術をいかに育成するかが各国とも大きな課題となってきています。

このように新たな技術が進展して、安全保障体制の根幹を変えるような変化が世界中で現れてきており、防衛省でも、従来の陸・海・空の領域での作戦能力の強化に加え、宇宙領域、サイバー領域、電磁波空間といった領域まで含め、領域横断（クロス・ドメイン）作戦が実現できる体制を構築することが打ち出されました。その領域では、いかなる部隊の組織編制が最適なものになるのか？ その分野のゲームチェンジャーになりうる防衛技術の研究開発をいかに進めていくべきなのか？ 大きく問われる時代の到来です。また防衛力は新しい技術のみだけで完結するものではなく、従来の基盤的な防衛技術なくして成立しうるものではありません。

今まで経験してこなかった新たな時代に入り、各自衛隊の各部隊も防衛技術の研究開発の最前線でも今まで以上の苦難が待ち受けていることは想像に難くないところです。新たな時代を迎えようとする時、求められることは正確な現状認識と将来への鋭い洞察であることは論を待ちません。

防衛技術協会は、昨年は、多くの客員研究員と賛助会員の皆様とともに、防衛技術を中心とした技術動向調査、防衛装備庁等の技術支援、国際展示会の出展支援の分野で活動し、多くの成果を上げることができました。今年は横断領域における防衛技術の現状と動向についても新たな視点から取り組み、関係者の皆様のご期待に応えていきたいと考えております。

また防衛技術ジャーナルでは第一線の軍事フォトジャーナリストの菊池雅之氏の連載が今月号から始まります。今までの防衛技術ジャーナルの切り口とは違う新鮮な視点からの記事にどうぞご期待ください。防衛技術協会が皆様の飛躍のためのジャンプ台になれることを願いつつ、平成から新しい時代への幕開けとなる本年が、皆様にとってより良い年になることをお祈りいたしております。